

平成二十七年年度 九州国際大学付属高等学校

# 国語 入学試験問題

問題用紙（1～11ページ） 試験時間（50分）

## 注意事項

1. 試験問題は、試験開始の合図があるまで開けないこと。
2. 試験開始後、問題冊子の印刷の不具合などに気付いた場合は手を挙げて監督者に申し出ること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 携帯電話、計算機、アラーム等の使用は禁止する。
5. 体調不良等の場合は監督者に申し出ること。
6. 問題用紙は、各自持ち帰ること。

## 字数制限のある問いについては、句読点も一字とします。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「人間は生きものであり、自然の中にある」。これから考えることの基盤はここにあります。これは誰もがわかっていることであり、決して新しい<sup>a</sup>シテキではありません。しかし、現代社会はこれを基盤にしてでき上がってはいません。そこに問題があると思い、改めてこのあたりまえのことを確認するところから出発したいと思います。

A、私たちの日常生活は、生きものであることを実感するものになっているでしょう。朝氣持よくめざめ、朝日を浴び、新鮮な空気を体内にとり込み、朝食をおいしくいただき……これが生きものの暮らしです。めざまし時計で起こされ、お日さまや空気を感ずることなどまったく腕の時計を眺めながら家をとび出す……実際にはこんな朝を過ごすのが、現代社会の、とくに都会での生活です。ビルや地下街など、終日人工照明の中で暮らすのが現代人の日常です。<sup>①</sup>これでは生きものであるという感覚は持てません。

生きものにとっては、眠ったり、食べたり、歩いたりといった「日常」が最も重要です。ですから、その日常のあり方を変革し、皆があたりまえに自然を感じられる社会を作ればよいのですが、ここまできた近代文明社会を一気に変換するのは難しいでしょう。

B、ここでの提案は、まずは一人一人が「自分は生きものである」という感覚を持つことから始め、その視点から近代文明を転換する切り口を見つけ、少しずつ生き方を変え、社会を変えていきませんかということです。一人一人の気持が変わらなのまま、たとえばエネルギーだけを脱原発、自然再生エネルギーに転換と<sup>b</sup>トナえても、今すぐの実現は難しいでしょう。しかもそれはあまり意味がありません。自然エネルギーを活用する「暮らし方」が大切なのであり、その基本が「生きものである」という感覚なのです。

近代文明をすべて否定するのではなく、生きものとしての感覚を持てるようにするところから転換をはかろうとするなら、生物学に大事な役割を果たせるはずと考えています。C 私自身この分野で学んだがゆえに、とくに意識せずに「生きものである」という感覚を身につけることができ、日常をそれで生きていけると実感するからです。簡単な例をあげるなら、<sup>c</sup>コウニユウ<sup>ウ</sup>した食べ物<sup>ウ</sup>が賞味期限を越えてしまったような時でも、それだけで捨てることができず、まだ食べられるかどうか、自分の鼻で、舌で、手で確認します。

鼻や舌などの「感覚」で判断するとはなんと非科学的な、そんなことで大丈夫なのか、もっと「科学的」でなければいけないのではないかと言われそうです。具体的には冷蔵庫から取り出したかまぼこに書かれた日時をさすわけです。<sup>d</sup>エイセイ<sup>②</sup>的な場所で製造されお店に出されていると信じ、安全性の目安として書かれている期限を見て、その期間に食べているわけです。それを科学的と称しているけれど、これでよいのでしょうか。こうした判断のしかたは、私には、自分で考えず科学という言葉に任せているだけに思えます。「科学へのX」で成り立つて

いるように思います。

もちろん、「感覚」だけではわからないことがたくさんあります。科学を通じて微生物による腐敗や毒物の生成などの危険性を知り、それに D、賞味期限内であれば危険はなく、それを過ぎたら危険と、数字だけできまるものではありません。科学的な知識があったとしても、毎日の生活の中で自分で病原菌や毒物を検出し、その食べ物が危険かどうかをチェックするわけではないのですから、科学による「保証」の限界を知ることが大事です。

食べ物を自らの手で作ったり、採ったりしていた時代には、安全性については自分で責任を持つしかありませんでした。科学・科学技術のおかげでより進歩した暮らしやすい生活ができるようになり、安全が保証された形で、食べ物が手に入るようになったのはありがたいことです。でも、そこに期限をきめる数字が印刷されるようになると、それに振り回され、それに従うことが ② 正しい暮らし方ようになってしまいました。自分ではまったく科学に触れているわけではない、時には科学的な考え方をするでもなく、ただ「科学が保証してくれているはず」という雰囲気の中で何も考えずに数字を鵜呑みにしているのです。そうではなく、生きものであることを忘れずに、 ③ その力を生かすことが必要であると思うのです。

ネズミやイヌなど他の生きものに比べたら きゅうかく 嗅覚などはかなり感度が悪くなっているとはいえ、私たちの五感はいいセンサーです。もちろん、上手に使っていないと鈍くなるので、感度を保つためにも日常その力を生かすことは大事です。科学を知ったうえで、機械だけに頼らず生きものとしての自分の感覚をも活用するのが、私の考えている「人間は生きものである」ことを基に置く生き方です。科学的とされる現代社会のありようは実は他人任せなので、これは「自律的な生き方」をしようという提案でもあります。

うっかり期限の過ぎたかまぼこをすぐには捨てずに鼻や舌を使うという小さなことですが、

I	II	
事	事	

この感覚を生かすとかかなり生活が変わり、そういう人が増えれば社会は変わるだろうと思うのです。常に自分で考え、自身の行動に責任を持ち、自律的な暮らし方をするのが、私の考える「 Y 」ということの第一歩です。

（中村 桂子『科学者が人間であること』から）

問一 二重傍線部①～⑥のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 空欄

A

D

に入るものとして、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア なぜなら    イ しかし    ウ そこで    エ まず    オ また

問三 本文には次の一文が抜けています。どの文の後に入りますか。直前の文の**最初の五字**を抜き出して答えなさい。

科学的とは多くの場合数字で表わせるといふことです。

問四

傍線部①「これでは生きものであるという感覚は持てません」について、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 私たちはめざまし時計で起こされ、いつも時計を気にする生活を送っているから。  
イ 私たちは他の生きものとは違い、人工的に作られた環境の中で生きることが好むから。  
ウ 私たちは自然界の一員として生きるべきなのに、人工物に囲まれて過ごしているから。  
エ 私たちは朝日を浴び、新鮮な空気を体内に取り込む暮らしを毎日続けているから。

問五

X

に入るものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 過信    イ 自信    ウ 妄信    エ 信頼

問六

傍線部②「正しい暮らし方」について、ここではどのようにすることですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 賞味期限を過ぎたら危険であると考え、その食べ物を捨ててしまうこと。  
イ 賞味期限を一応の目安とするが、最終的には自分の感覚で決めること。  
ウ 賞味期限を全く無視して、自分の鼻や舌や手で判断しようとする事。  
エ 賞味期限を考慮したうえで、火を通すなど調理方法に様々な工夫をすること。

問七

傍線部③「その力を生かす」とは、どういうことですか。そのことが書かれている部分を四十字以内で本文から抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問八

空欄

I

II

に漢数字をそれぞれ入れて、慣用句を完成させなさい。

問九 空欄 Y に入るものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 近代文明を否定する
- イ 地球の未来を考える
- ウ 科学的に判断する
- エ 生きものとして生きる

問十 本文の内容として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分自身の行動に責任を持つという生き方を貫き、日常のあり方を少しずつ変えていきながら科学的な知識を身につけていくのがよい。
- イ 日常生活の中では科学的な判断に基づいて行動できない場合もあるので、自分で物事を判断して行動しようとする姿勢をもつのがよい。
- ウ 何も考えずに科学的な知識に頼ることをやめてしまつて、自分の感覚だけを信じ、科学的な考えを完全に切り離さなければならぬ。
- エ 現代社会は私たちが生きものであることを実感できるものになっていないので、社会のしくみをすぐに変えていかなければならない。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「私」は十五歳の時、十三歳の「少女」(お前) やその兄たちと共に遊び、楽しい時を過ごした。それから三、四年が経ち、「少女」の兄から誘いを受けた「私」は、両親の許しを得て、夏休み  
に彼らと過ごすために丁村へ出かけた。

まだあんまり開けていない、その丁村には、避暑客らしいものは、私たちの他には、一組もな  
いくらいだった。私たちはその小さな村の人気者だった。海岸などにいると、いつも私たちの周  
りには人だかりがしたほほどに。そうして村の善良な人々は、私のことを、お前の兄だと間違えて  
いた。それが私をますます 有頂天<sup>I</sup>にさせた。

そればかりでなしに、私の母みたいな、子供のうるさがるような愛し方をしないお前の母は、  
私をもその子供並みにかなり 無頓着<sup>II</sup>に取り扱った。それが私に、自分は彼女にも気に入って  
いるのだと信じさせた。

予定の一週間はすでに過ぎていた。しかし私は都会へ帰ろうとはしなかった。

ああ、私はお前の兄たちに見習って、お前に意地悪ばかりしてさえ居れば、<sup>①</sup>こんな失敗は  
しなかったろうに！ <sup>②</sup>ふと私に魔がさした。私は一度でもいいから、お前と二人きりで、遊ん  
で見たくてしやうがなくなった。

「あなた、テニス出来て？」ある日、お前が私に云った。

「ああ、すこしくらいなら……」

「じゃ、私と丁度<sup>ちやうど</sup>いいくらいかしら？……ちょっと、やって見ない」

「だってラケットはなし、一体どこでするのさ」

「小学校へ行けば、みんな貸してくれるわ」

それがお前と二人きりで遊ぶには、もってこいの機会に見えたので、私はそれを逃がすまいと  
して、すぐ分かるような嘘<sup>うそ</sup>をついた。私はまだ一度もラケットを手にしたことなんかなかった  
のだ。しかし少女の相手ぐらいなら、そんなものはすぐ出来そうに思えた。お前の兄たちがいつ  
も、テニスなんか！ と軽蔑<sup>けいべつ</sup>していたから。しかし彼らも、私たちに誘われると、一しよに小学  
校へ行った。そこへ行くと、砲丸<sup>ほうがん</sup>投げが出来るので。

小学校の庭には、夾竹桃<sup>きょうちくとう</sup>が花ざかりだった。彼らは、すぐその木蔭<sup>こかげ</sup>で、砲丸投げをやり出  
した。私とお前とは、そこからすこし離して、<sup>③</sup>白墨<sup>はくぼく</sup>で線を描いて、ネットを張って、それから  
ラケットを握って、真面目<sup>まじめ</sup>くさって向かい合った。が、やって見ると、思ったよりか、お前の打  
つ球が強いのので、私の受けかえす球は、大概<sup>たいがい</sup>ネットにひっかかってしまった。五、六度やると、  
お前は怒ったような顔をして、ラケットを投げ出した。

「もう止<sup>よ</sup>みましょう」

「どうしてさ？」私はすこしおどおどしていた。

「だって、ちっとも本気でなさらないんですもの……つまりないわ」

そうして見ると、<sup>④</sup>私の嘘は看破られたのではなかった。が、お前のそういう誤解が、私を苦しめたのは、それ以上だった。むしろ、そんな薄情な奴になるより、嘘つきになった方がましだ。

<sup>⑤</sup>私は頬をふくらませて、何も云わずに、汗を拭いていた。どうも、さつきから、あの爽竹桃の薄紅い花が目ざわりでいけない。

この二、三日、お前は、鼠色の、だぶだぶな海水着をきている。お前はそれを着るのをいやがっていた。いままでのお前の海水着には、どうしたのか、胸のところに大きな心臟型の孔があいてしまったのだ。そこでお前は間に合わせに、あんまり海へはいらぬ、お前の姉の奴を、借りて着ているのだ。この村では、新しい海水着などは手に入らなかつた。一里ばかり向こうの、駅のある町まで買いに行かなければ。——そこである日、<sup>⑥</sup>私はテニスの失敗をつぐなうつもりで、自分から、その使者を申し出た。

「どこかで自転車を買ってくれるかしら？」

「理髪店のならば……」

私は大きな海水帽をかぶって、炎天の下を、その理髪店の古ぼけた自転車に跨って、出発した。

その町で、私は数軒の洋品店を捜し廻った。少女用の海水着の買物がなんと私の心を奪ったことか！ 私はお前に似合いそうな海水着を、とっくに見つけてしまつてからも、<sup>⑦</sup>私はただ私自身を満足させるために、いつまでも、それを選んで見るように見せかけた。

(堀 辰雄『麦藁帽子』から)

(注) ※ 白墨——白のチヨーク。

※ 一里——約四キロメートル。

問一 傍線部Ⅰ・Ⅱについて、この文章中の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ 有頂天うちようてん

- ア 我を忘れて得意になること。
- イ 平然と他人を見下すこと。
- ウ 高い理想を夢みること。
- エ 自分だけが優れていると思うこと。

Ⅱ 無頓着むとんちやく

- ア 自分の決まった考えがないこと。
- イ 細かい点まで気にかけないこと。
- ウ 計算高く行動すること。
- エ わざとらしく振る舞うこと。

問二 傍線部①「こんな失敗」とありますが、この一件でどのような印象を少女に与えたと「私」は考えていますか。そのことが書かれている部分を本文から抜き出し、五字以内で答えなさい。

問三 傍線部②「ふと私に魔がさした」とありますが、その時「私」はどういうことを考えていましたか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」は少女にわざと冷たくすることによって相手の気を引こうとしたが、うまくいかず、自分の得意なスポーツで少女の心をつかもうと思っていた。

イ 「私」は少女に意地悪を繰り返すうちに信頼を失ったが、彼女の得意なテニスを一緒にすることで相手の気を引き、再び信頼を取り戻したいと思っていた。

ウ 「私」は人気者として扱われていることに自信を持ち、少女とテニスをすることによって、周囲の人から仲の良い恋人として認めてもらいたいと思っていた。

エ 「私」は少女からテニスに誘われたことを良い機会だと捉え、テニスをすることに同意し、好意を寄せる少女と二人だけの時間を過ごそうと思っていた。

問四 傍線部③「真面目まじめくさって向かい合った」について、「私」がこのような態度を取ったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 予想もしなかった少女の熱い恋心を、正面から受け止めようと思いついたから。

イ 自分に関心の薄い少女と一緒にいたくない気持ちを、悟さとられたくなかったから。

ウ テニスに興味がないことを気づかれないように、懸命つとむに繕つくろおうとしたから。

エ 思いやりに欠けた少女をこらしめるには、真剣に取り組むほかなかったから。

問五 傍線部④「私の嘘うそ」について、本文にはそのことに対する真実が書かれている一文がありません。その一文を本文から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問六 傍線部⑤「私は頬ほおをふくらませて、何も云わずに、汗を拭ふいていた」について、この時の「私」の様子を説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 少女と二人だけで楽しい時間を過ごすつもりであったが、思い通りにいかなかったことに對して戸惑とまじいといら立ちを感じている様子。

イ 少女にからかった態度を取って不誠実な人間だと思われたことにより、今後、少女との関係がいつそう悪くなることを心配している様子。

ウ 一方的にテニスをやめるといふ発言をした少女の態度にひどく腹を立てながらも、少女に對して正直に真実を話そうかと迷っている様子。

エ 真剣な態度でテニスに取り組んだのだが、少女から全然理解してもらえなかったことに自尊心を傷つけられ、ひどく落ち込んでいる様子。

問七 傍線部⑥「私はテニスの失敗をつぐなうつもりで、自分から、その使者を申し出た」について、その時の「私」の心情を言い表した四字熟語として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 疑心暗鬼      イ 自業自得      ウ 暗中模索      エ 名誉挽回ぼんかいかい

問八 本文は三つの意味段落から構成されています。第二段落と第三段落の最初の五字を本文からそれぞれ抜き出して答えなさい。

問九 傍線部⑦「私はただ私自身を満足させるために、いつまでも、それを選んでいるように見せかけた」について、「私」がこのような態度を取ったのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 少女のために選んだ海水着が少女に似合っているかどうかあまり自信がなかったため、確信が持てるまでじっくり悩んでみたかったから。

イ 少女のために海水着を選んでいるという行動に対して大きな喜びと充実感を感じており、その気持ちにずっとひたっていたかったから。

ウ 少女から意地悪な人間だと嫌われているが、海水着を渡すことで、少女との恋が発展していくのではないかと期待をふくらましていたから。

エ 少女のために喜んで海水着を選んでいる自分の姿に気づき、少女の恋心を受け入れなかった過去のことを振り返って考えてみたかったから。

問十 本文の内容と表現の特徴についての説明として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 季節を感じさせるものや出来事を多く描<sup>えが</sup>いていることから、「私」と少女が夏を開放的な気持ちで過ごしていることや、「私」と少女の心が次第に通じ合っていく様子を読み取ることができる。

イ 田舎の情景を多く描写していることから、少女と「私」が豊かな自然の中で愛を<sup>はぐく</sup>んでいることや、のんびりとした環境の中で「私」が素直さを徐々<sup>じょじょ</sup>に取り戻していく様子を読み取ることができる。

ウ 自分の気持ちや行動を第三者的な立場で分析している表現から、少女に一途な恋心<sup>いちず</sup>を抱きつつも、客観的なものの見方で、冷静に自分を観察している「私」の態度を読み取ることができる。

エ 短い会話を多用していることから、「私」が少女に対してわざとそっけない態度で気を引こうとしていることや、他者と深く関わりたくないという気持ちで行動していることを読み取ることができる。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(漢字の読みは現代仮名づかに直しています。)

これも今は昔、慈恵僧正※じえそうじようは※Aあふみのくに浅井郡あさいごおりの人なり。叡山えいざんの※かいだん戒壇をI人夫にんぶかなはざりければ、え築つかざりける比ころ、浅井の※ぐんじ郡司は親しき上に、※しだん師檀にて仏事を修しゆする法要をいとむ時、

間、この僧正をBしやうじ奉たてまつりて、僧膳そうぜんの料りように、前まへにて大豆を炒いりて酢すをかけけるを、「何

しに酢をばかくるぞ」と問aはれければ、郡司Cいはく、「暖かなる時、酢をかけつれば、※すむ

つかりとて、bにがみてよく挟はさまるるなり。然しからざれば、すべりて挟はさまれぬなり」といふ。僧正

のいはく、「いかなりとも、なじかは挟はさまぬやうやあるべき。投げやるとも、挟はさみ食くひてん」とあ

りければ、「いかで①なる事あるべき」とあらがひけり。僧正、「勝ことごとち申しなば、異事ことごとあるべか

らず。戒壇を築cきて給たまへ」とありければ、「やすき事②」とて、炒大豆いりを投げやるに、※一間いば

かり退のきて居い給たまひて、一度も落おとさず挟はさまれけり。見る者あさまずといふ事なし。柚ゆの実さねの只ただ今

しぼり出いしたるをませて、投げやりたるをぞ、挟はさみすべらかし給たまひたりけれど、落おしもたて

ず、またやがて挟はさみとどめ給たまひける。郡司い一家いっけ広ひろき者なれば、人数をおこして、不日ふじつに戒壇を築

きてけりとぞ。

(『宇治拾遺物語』から)

(注) ※ 慈恵僧正——比叡山延暦寺の高僧、良源のこと。

※ あふみのくに——現在の滋賀県。

※ 戒壇——僧侶になるための儀式を行う場所。

※ 郡司——郡を治める役人。

※ 師檀——寺の僧侶と檀家(その寺に墓地を持つ家)の間柄。

※ すむつかり——料理の一種。大豆に酢などを混ぜて煮たもの。

※ 一間——約一・八メートル。

問一 二重傍線部 A ～ C を現代仮名づかいに直しなさい。

問二 波線部 a ～ c の主語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 慈恵僧正    イ 浅井の郡司    ウ 見る者    エ 柚ゆの実さね    オ 大豆

問三 傍線部 I・II の口語訳として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

I 人夫にんぶかなはざりければ

- ア 働き手が力持ちではなかったので  
イ 働き手を集めることができなかった  
ウ 働き手の願いがかなわなかった  
エ 働き手が指示に従わなかった

II あらがひけり

- ア 仏に祈った  
イ 大声を出した  
ウ 自慢をした  
エ 言い争った

問四 傍線部①「さる事」について、具体的な内容が書かれている部分を三十五字以内で本文から抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問五 傍線部②「やすき事」について、何をすることが簡単なことかというのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 投げられた炒いり大豆を落とさず挟むこと。  
イ 慈恵僧正に対して料理を振る舞うこと。  
ウ 多くの働き手を使って戒壇を築くこと。  
エ 卓越した技術で見る者を感じさせること。

問六 本文の内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 慈恵僧正は浅井の郡司の師匠で、いつも食事などの世話になっている。  
イ 慈恵僧正は浅井の郡司と賭かけをして、不正を働いてむりやり戒壇を作らせた。  
ウ 慈恵僧正は浅井の郡司の命令で大豆料理を作り、戒壇を作る働き手に振る舞った。  
エ 慈恵僧正は投げられた大豆を一つも落とすことなく、すべて挟んで受け止めた。